
真・恋姫無双 十番隊隊長の冒険

友季 和斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 十番隊隊長の冒険

【コード】

N8089T

【作者名】

友季 和斗

【あらすじ】

涅に呼び出された日番谷が受ける、理不尽な実験によって向かう日番谷の運命は！？

第1話 日番谷、飛ぶ（前書き）

脱色×恋姫のコラボです！
駄文ですが、よろしくです

第1話 日番谷、飛ぶ

「おはようございます!」

「おはよう」

「おはようございます、隊長!」

「ああ、おはよう」

俺の名前は日番谷冬獅郎。護廷十三隊・十番隊の隊長だ
先の藍染の反乱から続いていた破面アラソカル、そして藍染との戦いは黒崎一護が藍染を追い詰め、浦原喜助の新しい鬼道により、封印され終結した

そして、尸魂界ソウル・ソサエティと現世に平和が戻った今、俺たちは尸魂界に戻り、事後処理に当たっていた

「さて…今日は何から始めるか…」

「たいちよ〜!居ますかあ?」

何から始めようかと思案していると、扉の向こうから声が聞こえ、扉が開かれると入ってきたのは十番隊の副隊長の松本乱菊だった

松本はいざと云う時は真面目なのだが、普段は物凄くだらしない女なのだ

「隊長、今私の悪口：言ってますでした？」

「言ってるねえ。で、何か用か？」

「あゝそうそう、十二番隊の涅隊長から今すぐ技術開発局まで来てくれて言伝頼まれちゃって」

入ってきてすぐにソファに腰掛ける松本。俺は軽いため息をつき何枚かの書類を手に取り立ち上がる

「…わかった、悪いが戻るまでこいつを頼む」

俺はその書類を松本に渡し、部屋を出る

「ちょっと隊長！仕事の押しつけはいけませんってばあ！」

「知るか」

俺は松本の言葉を一蹴し、技術開発局に向かう
最近仕事をしていない罰だ

「おや、やっと来たかね…全く、薄鈍にも程があるよ」

「…斬つてもいいだろうか？」

「で、何の用だ？涅」

「実はだね、少し行ってもらいたいところがあるのだよ」

「？か？…だが、なぜお前に呼ばれるんだ？」

「それはだねえ…」

前を向き、コンソールを操作し始める
それを見る俺に涅が問いかけてきた

「君は…三国志を知っているかね？」

「はあ？…まあ、多少は」

「なるほどね…合格だよ」

「おい、涅…訳が分からないんだが！？」

「しょうがないねえ…こちらに来たまえ」

俺は、手招きする涅を見て何かしら説明があると思い、歩を進める

「ほい」

その涅の言葉と共に、額に何か刺さった上を見ると、それは注射器の針だった

「ちよっ…えええっ!?!」

「投薬完了。直に効果が出始めるよ」

その言葉通り、俺の体が『ピカーッ』と言う単語が当てはまるほどに眩しく光り出した
当然、俺は眩しくて目を開けられない。そして暫くして光が収まり、目を開けるとそこには…

「「……あれ？」」

「実験大成功だよ!さ、ここに入りたまえ」

涅は片方の俺を掴み、怪しげな箱に突っ込み、蓋をし、封をする

「ネム、始めてくれ」

「はい、マユリ様」

そして、十二番隊副隊長、涅ネムがレバーを下ろし機械を作動させる。その瞬間俺の入った箱は光に包まれ、その場から消え去った

「実験成功だよ…よくやったよ、ネム」

「ありがとうございます…マユリ様」

そんな二人を見ながら俺は問いかける

「で、結局…何の実験だったんだ？」

「ネムが時空間転移装置を作ったと聞いてね…その実験だったのだよ」

俺がそれを見ると、その装置は煙を上げ、小さな爆発を起こし…壊れた

「……………保険のために、日番谷冬獅郎を分裂させて正解だったよう

だ

「おい…それはどういう…」

「ん？ああ、君はもう帰っていいよ。貴重なデータをも得られたことだ…ネム！早速データを解析するよ！」

「はい、マユリ様」

そう言いながら二人は奥の研究室に行ってしまった

……すまん、もうひとりの俺…元気で暮らせよ

俺は心の中で届くかどうかともわからない謝罪をして自分の隊の隊舎に戻った

そして……

「…JJJ……JJJ～」

冬獅郎は三国志の世界に飛ばされていた

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第2話 日番谷、出会う

「……………」

俺、日番谷冬獅郎は今、荒野にいる。涅マユリの訳の分からん実験に付き合わされ、こうなっているわけだが…

「ここは…現世か」

周りの岩や荒野は霊子で構成されていない。まんま土だった
だが、ここは空座町ではない。というか、日本にこんな荒野はま
ずないだろう…

「……………ここでこうしていてもしょうがねーか…」

俺は何処へと無く歩きだした。

全く…涅の野郎…ろくな事しやがらねえ

一人愚痴りながら歩いていると、三人の人間がこっちに歩いてくる
容姿は三人バラバラだが、共通して黄色の布を頭に巻いていた
そしてその三人は俺に気づいてこっちに歩いてきた

「おい、そのガキ」

「ガキじゃねえ……で、何の用だ？」

「お前のその服……なかなかのものと見たぜえ？俺たちに寄越しな！」

「っ、ついでに……その武器も置いていくんだな……」

「……断る……と言ったら？」

「そんなときは……さよならだ！」

剣を振り上げるようにし、俺に斬りかかる。俺は一步下がりに冷静に
躲す

「止めろ！……殺したくはない」

「ガキが……一丁前に言いやがる！」

「ちっ……仕方ねえな！」

俺は、刀を抜き斬りかかってくる男の剣を受け止める、そしてそのまま相手の剣を弾き飛ばし、男の首を刎飛ばした

「あ、アニキ！てめえ！」

男を殺した俺に怒りを覚えたのか、小さい男が斬りかかってきた

「くそっ…止める！」

一度刀で受け、距離を置く…が背後から太った男が斬りかかる！

「し、死ぬんだな！」

「死ぬかよ…！」

斬撃を躲し、右手をかざす

「破道の三十三、蒼火墜！」

右手の掌から発せられる蒼い爆炎が二人を包み込み、命を刈り取る
そして、爆炎が消え去ると、そこに残るのは三体の亡骸

「…悪いな、俺はこんなところでくたばるわけにはいかないんでな」

その時、何処からか手を叩く音…拍手の音が聞こえてきた
振り向くと、三人の女が立っていた

「なかなか、やりますなあ」

「そうですねー」

「妙な技も…使うようですし」

「…お前たちは誰だ？」

「これは失礼、私は趙雲、こちらの小さいのが程立で、こちらの眼鏡を掛けたのが戯志才といいます」

「小さいのとは失礼ですねー」

「で、あなたは？」

「俺は、日番谷冬獅郎だ」

俺は改めて三人を見る…趙雲、程立、戯志才…皆、名前が三国志に出る名前だ。俺は思い出す

『君は、三国志を知っているかね？』

そういふことがよ…

「日番谷…変わった名前ですな」

「ですねー」

「もし、差し支えなければ一緒に行きませんか？」

確かに、今の俺には情報が少なすぎる。何かの罠とも考えられるが…今は情報だ、ついていくか…と考えている俺を余所に、女同士で盛り上がっている。どこの世界でも女は変わらないな

「わかった、世話になる」

「そうですか。こちらこそお世話になります」

「おー、すでに稟ちゃんはこのお兄さんに『色々』お世話になるつもりですねー」

「おやおや、見かけによらず手が早いすなあ」

「ふ、風！何を言うのですか！」

「…おい、さっさと行くぞ」

こうして、冬獅郎は姦しい三人を仲間にし一路、袁紹のいる冀州に

向
か
っ
た

第2話 日番谷、出会う(後書き)

第3話 日番谷、バカ姫に会う

俺は日番谷冬獅郎。今、俺は冀州の？にある袁紹の城に居る

どうやら、三人は旅に必要な資金が底を付きそうになったので、一時的に客将として雇ってもらったための試験を受けるらしい。という訳で、俺もついでに受けることにした。ここで生きるために金は必要だ

「えー、ではこれから試験を始めますので、文官での登用を希望の方は係の者が案内しますのでこちらにどうぞ」

「では、星ちゃんにお兄さん、また後でー」

「頑張ってくださいね、日番谷殿、趙雲殿」

「うむ、二人もな」

「頑張ってくださいよ」

「では、武官希望の方は試験を始めますので、番号を呼ばれた方から試験を行います。では一番二番の方…」

試験が始まり、俄に辺りが騒がしくなってきた。俺と趙雲は特に緊張することもなく、待っていた

「日番谷殿は腕に自信はお有りかな？」

「さあな…だが、ここで負ける気はねえがな」

「左用か」

「十四番、趙雲殿！前へ」

「おっと、出番のようすな。では、お先に」

「ああ、落ちるなよ」

「二十番！日番谷冬獅郎殿！前へ」

「呼ばれたか…よし、行くか」

俺たちは、次々と試験をクリアしていった。腕の立つ者も多少はいたが、そこまで苦戦はしなかった

そして、残ったのは俺と趙雲を含めた十名

「あなたがた十名は見事試験に合格しましたので、明日袁紹様に会っていただきますので、今日は城の方で泊まっていたいただきます。では文官の合格者が来るまで少々お待ちください」

「日番谷殿」

意気揚々と趙雲がやって来た。心無しか嬉しそうだ

「趙雲か…残ったようだな」

「ええ、あの程度の者共では話になりませんな」

「やるじゃないか」

「それは、お主もですぞ？」

「まあ、そうかもな」

「お兄さん」

趙雲と話しているうちに、程立と戯志才がやって来た。どつやら無事に合格したようだ

「お兄さん達も無事合格したようですねー」

「ああ」

「日番谷殿の技はなかなかの物でしたぞ」

「それは…いつか見てみたいものですね」

その後、俺たちは各自部屋で試験の疲れをとった

「皆、おはよう」

「おはようですよー」

「おはようございます」

「……………おはよう」

朝、俺は不機嫌だった。どうにも一睡もできなかった…その理由は…

「何を不機嫌になっているのですか？冬獅郎殿」

「お前のせいだろうか！」

余りにもしれっとした態度をとる趙雲に、俺は大声を出してしまう
それでも知らぬ存ぜぬを通す趙雲。だが、すぐにバレてしまうこと
となる

「星ちゃん、何時からお兄さんのことを冬獅郎と呼んでいるのですか？」

「そ、そうです！いつからそんな仲良く！」

「昨日、少し寢床にお邪魔したのでな…なかなか熱い夜でしたぞ？冬獅郎殿」

「嘘付けー！！！」

昨日は、ただ添い寝されただけだ…だが、そんなことで二人の追撃は止まらない

「ズルイですよー星ちゃん」

「寢床に…！？ま、まさか…お邪魔した趙雲殿が強引に日番谷殿の貞操を…あう」

何かを呟き始めたと思ったら鼻血を垂らす戯志才。どうしたんだ…！？

「すみませんねー、稟ちゃんは妄想しすぎると鼻血を出しちゃうんですよ。はい稟ちゃんほとんどんしましよーねー」

……な、なかなか特徴的な女だな…

程立の話だと、今回はまだましたそうだ

どっだけなんだ、戯志才

と、そんなことをしているうちに袁紹に呼ばれた

「おーっほっほっほ！私が名門袁家の頭領である、袁！本！初！ですわ！」

………な、なんだ？この女は

俺は、一抹の不安を覚えながらも袁紹と対面した

T o b e C o n t i n u e d

第4話 日番谷、初陣

「……………」

俺は、日番谷冬獅郎。ひよんなことから三国志の世界に来てしまったんだが、そこで出会った趙雲達は女だった。そんな不思議体験をしながらも、袁紹と対面したのだが…

「今回はあなたがた五人以外の方は登用を見送らせていただきましたわ」

いま、この場には袁紹と直属の部下二人に俺、趙雲、程立、戲志才、そして、荀？と名乗る少女
荀？と言えば、曹操の軍師の名だ。どうやらまだ曹操には出逢っていないようだ

「あなたがたの能力は他の方と比べて抜きん出ているので、この五人でいいと麗羽様のお考えです。ですので…」

おかつぱの女が理由を述べている…が、普通五人だけは有り得ないだろう

人数は多いに越したことはないのだ。あまり多すぎてもダメになるが…

「以上で、説明は終わります。これからは袁家の客将として、誠心誠意お仕えしてくださいね」

「では、私はこれにて失礼させていただきますわ、頑張ってくださいまし」

そう言い残して袁紹はさっさと行ってしまった

…結局、自己紹介だけで帰ってしまったな

「では、趙雲殿、日番谷殿は練武場にお越しく下さい。お任せする部隊の顔合わせを行いますので」

「了解した」

「気骨のある兵士だと良いですな」

練武場

「こちらがこれからあなたがたの部隊長になる趙雲殿と日番谷殿です。皆さん仲良くしてあげてくださいね」

「……………はっ！」「……………」

なんだこの小学生みたいな紹介は…

「私が趙雲だ皆、よろしく頼む」

「…日番谷冬獅郎だ。至らない所もあると思うが、よろしくな」

「……………よろしくお願ひします！」「……………」

…十番隊を思い出すな…よし

「ではこれより、鍛錬を行う！まずは素振り千本、始めっ！」

「……………！」「……………！」「……………」

「冬獅郎殿は意外に熱血ですな」

「まあ…部下に死なれちゃ、夢見が悪いんでな」

「確かに、そうですね」

…もちろん守れるなら守ってやるつもりだ。だが、すべて守れるとは限らない、だから俺は即鍛錬に移った

鍛錬の様子を眺めていると、ひとりの兵士が慌ててやってきた

「日番谷隊長！ここから東の村が盗賊の襲撃を受けています！袁紹様から出撃の命が下りました」

「何だと！？…よし、趙雲、出撃準備だ」

「わかりましたぞ……って冬獅郎殿！？どこに行かれるか！？」

「先に行く！」

「お、お待ちくださいな！」

後ろから聞こえる趙雲の声を聞かず、俺は村まで駆けた

「村を守れえええっ！！！！」

「皆殺しだ！殺せええっ！！！！」

村では今まさに盗賊と村の若者が戦闘を繰り広げていた
この村は比較的盗賊に襲われない位置にあっただが、最近によく
狙われている

「きゃあああっ！！！！」

「死ねえええ！！！！」

逃げ遅れた女性に剣が振り下ろされる瞬間、女性の目にありえない
光景が映し出される

「ぐあああああ……！！」

目の前を、何かを通り過ぎていった、目を凝らしてみると、それは
氷の竜

「な……なに……？」

「霜天に坐せ！氷輪丸！」

女性が聞こえてきた声の方を向くと、冬獅郎が刀を振り、氷の竜を出し、盗賊を攻撃している

「大丈夫か？」

「は、はい！」

「ここは俺が抑える。お前は早く逃げる」

「わ、わかりました」

「逃すなあああ！！！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ…破道の七十三、双蓮蒼火墜！」

襲いかかってくる盗賊達に、蒼火墜以上の青い爆炎が襲いかかる
そして、耳をつんざくほどの大爆発に盗賊は驚き、逃げ始める

「な、なんなんだ！あの化け物は！」

「は、早く逃げろ！！！」

「賊は逃すな！かかれえい！！！」

「「「「「おおおおおっ！！！！」「「「「「

遅ればせてやって来た趙雲と兵士たちが逃げ出す盗賊立ちを一掃する

「冬獅郎殿…あの氷の竜は何なのですか？」

「氷輪丸の能力だ…ひと振りすれば水と氷の竜を作り出し攻撃するんだ」

「なんと…!!」

「まあ、大勢相手に真価を發揮する奴らもいるからな」

「ほほう…ところで、冬獅郎殿はどこのお出身ですか？」

「ソウル・ンサエテ尸魂界の西流魂街一地区「潤林安」だ」

「そつる…？…なるほど…」

…なるほどって…わかってんのか？…

「さ、帰りましょう！冬獅郎殿」

「そつだな」

こうして、俺は三国志での初陣を勝利で終わらせ、帰った

そして翌日、「天の御遣い」という言葉に振り回されることになる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089t/>

真・恋姫無双 十番隊隊長の冒険

2011年6月11日10時13分発行